

平成二十六年十二月

# えひめの交通安全へ こどもの願い

交通安全に関する小・中学校児童生徒の作文第三十七集

一般社団法人 愛媛県交通安全協会

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年「えひめの交通安全へこどもの願い」作文を募集しています。

この作文募集は、小・中学生の情操教育に資するとともに交通安全について関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合せて百六十七校から一千四百八十九編という多数の応募がありました。

この応募作品について、地域の地区交通安全協会で第一次審査に付した後、上申のあつた百三編を愛媛県教育委員会に厳正な審査をお願いし、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んいただきました。

作文の多くは、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が事故の被害者になったことなど、交通安全や交通事故を他人ごとではなく、自分自身のこととして安全への願いが切実に訴えられており、ひしひしと胸に迫るものがありました。「交通安全は家庭から」と言われていますが、まさにお茶の間の団らんは生きた交通安全教育の場であることを物語る作品も数多くありました。

この純真な気持ちを「交通安全」に役立たせていただくために、入選作文二十五編を「えひめの交通安全へこどもの願い」作文第三十七集として発刊いたしました。

この作文集が家庭や学校等で、一人でも多くの方に読んでいただき、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

最後に、この作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様にお礼を申し上げますとともに、今後とも交通安全に御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十六年十二月

# 愛媛県交通安全協会入選作文目次

## 「小学生の部」

こうつうあんぜん	今治市立上浦小学校	一年	後藤 心那	1
こう通ルールをまもっていつもえがおで	四国中央市立寒川小学校	二年	真鍋 陽咲	1
わたしとおうだんほどう	松山市立宮前小学校	二年	樋笠 結心	2
ゆずり合う気持ち	四国中央市立金生第二小学校	三年	阿合 優成	3
自転車大すき	松山市立姫山小学校	三年	永田 真悠	4
たった一つしかない命	西条市立庄内小学校	四年	木原 優衣	6
車を運転する人へのおねがい	松山市立北条小学校	四年	横山 璃瑠	8
交通事故のない安全な町に	鬼北町立三島小学校	四年	高瀬まとい	9
あのときの体験を生かして…	東温市立拝志小学校	五年	永井 寧緒	10
交通事故にあって	八幡浜市立松蔭小学校	五年	伊藤 誠剛	11
交通事故をへらしたい	鬼北町立好藤小学校	五年	川添明日香	13
命を守っていくために	西条市立西条小学校	六年	山内 陽日	14
子どもの事故をなくすために	内子町立内子小学校	六年	沖野 文華	16

## 「中学生の部」

思いやりの心を持って	四国中央市立川之江北中学校	一年	重見 昇吾	18
交通事故から思うこと	今治市立吉海中学校	一年	堺 大起	20
交通事故のつらさ・願い	八幡市立双岩中学校	一年	菊池 萌香	21
自分を振り返って	八幡市立愛宕中学校	一年	玉岡 真愛	23
私の交通安全の基本	西条市立東予東中学校	二年	竹中 侑衣	24
母の「気をつけてね」	伊予市立伊予中学校	二年	阿部美菜実	26
命を守るためにできること	八幡市立愛宕中学校	二年	松浦 希緒	27
私たちにできること	八幡市立保内中学校	二年	奥野 愛唯	29
交通事故を体験して	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	相原 彩乃	31
守り守られ続けたい安全	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	和田 幹	33
交通事故から学んだこと	松山市立内宮中学校	三年	土居百々香	34
交通事故をなくしたい	松山市立垣生中学校	三年	井上 瀬菜	36

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

## 【小学生の部】

### こうつうあんぜん

今治市立上浦小学校

一年 とうとう ここな

わたしは、こうつうあんぜんについて、じぶんできをつけていること、それはどうろへはとびださない。くるまは、きゆうにはとまれない。そこにわたしがとびだしたら、ぶつかってこうつうじこになるから、とびだしはしたらいけません。まだほかにもあります。どうろであそばないことです。どうしてかという、どうろでかがんであそんでいると、うんでんしているひとからみえないからです。くるまがきそうなところでは、あそんだら、いけません。

じてんしゃにのるときも、きをつけていることもあります。それは、ヘルメットをかぶります。こけたときにあたまをまもります。

どうろは、みんながつかうところ。じぶんのことだけでなく、ひとのこともかんがえなくては、いけません。それがこうつうあんぜんをまもることです。

### こう通ルールをまもっていつもえがおで

四国中央市立寒川小学校

二年 真鍋 陽咲

わたしの通っている小学校では、はんでしゅうだんとう校をしています。学校までは二十分くらいかかります。通学ろのと中にはあぶないところがたくさんあります。ふみきり、歩道きよう、しんごうきのないおうだん歩道、歩道のないせまい道。でも、入学したばかりのころは学校まで歩いて行くことに一生けんめいで、あぶないことにぜんぜん気がつきませんでした。それに、はん長さんやふくはん長さんが、あぶなそうな時にはわたしたちのめんどうをみてくれました。今、わたしは二年生です。一年たって少しずつ自分で気をつけながらとう下校できています。

ふみきり。さいしょのころは、わたっていると中で音がなつてぼうが下りてきたらどうしようとかんがえるととてもこわかったです。だから、いつもあわてて前の人についてはしていません。でも、今はちがいます。おちついて左右を見て、あんぜんなことをたしかめてから歩いてわたっています。歩道きよう。わたしは雨の日に足をすべらせてころんでしまったことがあります。その時は、いたかったけど、前の人との間をしっかりとあけて歩いていたので、ほかの人がおされて一しよにけがをしなくてよかったです。雨の日のとくに下りる時が一ばんあぶないです。みんなが間をあけて、いそがせたりあわてたりしないでゆっくり気をつけて歩くことが大切です。

しんごうきのないおうだん歩道。ようち園の年長組の時、けいさつしよに行きました。そこで、三つのやくそくをみんなで大きな声で言いました。

一、 右がわを通ります。

二、 かならずとまります。

三、 右を見て左を見て、もう一ど右を見て、手をあげてさつとわたります。

おうだん歩道をわたる時は、いつも三つのやくそくの二と三を思い出して心の中で言っています。

歩道のないせまい道。三つのやくそくの一つ目をまもっています。友だちとおしゃべりをしないで、まっすぐに一れつになつて右のすみを歩きます。

歩行しやと車や自てん車などのうんでんしやが、それぞれルールをしっかりと持ちまもればこう通じこはおきないとおもいます。今日だけ、今だけ、ちょっとだけというあまえがじこにつながります。じこはみんなをかなしい気もちにさせます。一しゆんでみんなのえがおをけしてしまいます。わたしは、いつまでもみんながえがおでいられるように、これからもこう通ルールをしっかりと持ちまもりたいと思います。

## わたしとおうだんほどう

松山市立宮前小学校

二年 ひがさ ゆい

わたしは、ときどき一人でおばあちゃんの家に行くことがあります。とても近いけどおうだんほどうも、しんごうもありません。右からも左からも前からもしどう車がきます。いつもお母さんから、

「ちゃんと右、左を見てから気をつけて行ってね。」

と言われます。なのでわたしは、ちゃんとミラーを見て、車がきていないかかくにんしておばあちゃんの家に行くようにしています。

わたしは、ある日ゆうびんきよくへきつ手をかいはしりながら行こうとしました。ちょうどそのときは、しんごうが青だったので右、左を見ずにそのままはしりながら手もあげて、おうだんほどうをわたろうとしました。その時、キッキーとブレーキの音がして、わたしはびっくりしました。お母さんが、

「あぶない。」

と言いました。わたしは、しんごうは青だったし手もあげていたのにどうしてじどう車にぶつかりそうになったのかなと思いました。お母さんは、

「ここは、こうさてんといつて青でもまがつてくる車もいるから、青になつてもちゃんと右、左をかくにんしないといけないよ。」

と言いました。わたしはおうだんほどうがあるから、あんし

んしてわたろうとしたけどまがつてくる車もいるんだなと思  
いました。これからは、おうだんほどうがあつてもしんごう  
が青でもちゃんと右、左をかくにんしてわたろうと思いま  
した。

それともう一つお母さんがとまってくれた車に、おじぎを  
していました。わたしは、

「どうしておじぎをしているの。」  
ときくとお母さんは、

「とまってくれた車におれいの気もちをこめておじぎをして  
いるんだよ。」

と答えてくれました。そしてわたしもとまってくれた車にお  
じぎを試みました。そうすると、もつとあんしんしておう  
だんほどうがわたれるなと思いました。

わたしはこれから、一人で歩くこともふえるようになる  
と思います。あぶない思いもしたくないのでこうつうルールを  
まもっていききたいです。

## ゆずり合う気持ち

四国中央市立金生第二小学校

三年 あ合 ゆうせい

ぼくは、じゆくへ通うのに、いつもお母さんに車でつれて  
いってもらっています。じゆくへの道の中には、とても道  
はばがせまい区間があつて、そこで前から車が来ると、バッ  
クしないといけません。だいたいは、広い場所が近いほうが、  
そこまでバックして、よけます。でも、ある日のじゆくの帰  
りに、もう少しで広い道はばの所へ出られそうになつた時に、  
前から車が来ました。前から来た車は、十メートルくらいバ  
ックすれば広い道にもどれるのに、ぜんぜんバックせず、止  
まったままでした。お母さんは、はじめはこまった顔をして  
いたけど、すぐに何か分かつたようで、バックし始めました。  
三十メートルくらいバックして、やっと広い道にもどりました。  
そして、前からきた車を通してあげました。よく見ると、  
運転せきには、おばあさんがすわっていて、とてももうしわ  
けなさそうに、何度も頭を下げていました。お母さんもえ顔  
で頭を下げていました。おばあさんは、あまり運転になれて  
いないようでした。はばのせまい道でバックするのは、むず  
かしかつたようです。お母さんは、運転せきでこまっている  
おばあさんを見て、それですぐにバックしてあげたようでした。  
ぼくはこの時、なんだかうれしい気持ちになりました。  
ゆずり合ったり、助け合ったりすることは、本当に大事なな  
あと、思いました。

道を歩いている時でも、ゆずり合いの大切さを体けんしま



した。ぼくが道をわたろうと、横だん歩道に立っていると、車が止まってくれたことが、とてもうれしかったです。もし、だれも止まってくれなければ、ぼくは長い間、道をわたれずにごまっただろうなあ、と思いました。

ぼくは、三年生になって、学校で自転車けんていをうけました。けいさつのかたが、自転車の交通ルールを教えてくださいました。

まず、自転車に乗る前に、後ろをかくにんすることや、左右をよく見て、道の左がわを通らなければいけないことなど、とても大切なことを、たくさん教えていただきました。ぼくも、これからは自転車を運転するがわになるので、歩いている人に気をくばって、ゆずり合いの気持ちをもって、自転車の乗りたいと思います。そして、学校で教わった、自転車の交通ルールをしっかり守りたいと思います。

交通ルールは、道ろを使う人みんなが守らなければいけない、やくそくだと思います。自分一人くらいなら、だいじょうぶだろうと思って、交通ルールを守らないのは、本当にきけんで、もしかすると、大じこになるかもしれないのです。じこで、大けがをしたり、大切な命をうしなってしまうかもしれないません。そんなことがおこらないために、交通ルールというやくそくを、みんなですっかり守って、そして、一人一人がゆずり合いの気持ちをもって、道ろを安全に使うことが、とても大切だと思います。

## 自転車大すき

松山市立姫山小学校

三年 永田 真悠

「わっ。」

「ガツチャーン。」

小学校二年生の夏休みのことです。わたしはお母さんと近くのスーパーマーケットに自転車に乗って買い物に行きました。帰り道、角をうまく曲がりきれず、その角のおうちの庭に自転車ごとつつこんでしまいました。その時にそこに止まっていた車に当たってしまったのです。後ろから来ていたお母さんがすぐに、

「だいじょうぶ？けがはなかった？」

と尋ねてくれました。スピードを出してなかったのか、自転車に乗ったままで止まったので、わたしの体はどこにもぶつけることはなく大じょうぶでした。でも、止まっていた車に自転車当たってしまった。車の後ろの部分に少しきずがついてしまいました。わたしは、

「どうしよう、どうしよう」と思うだけで、何をしたらいいのかすぐに分からず、ただ立っているだけでした。するとお母さんが、

「わざとぶつかったわけじゃないから、しょうがないよ。でも、人の物をきずつけたらまず、何をしなければいけないのかな？」と聞いてきました。わたしはやっと落ち着いて考えることができました。

「あやまらんといかん。」

と答えました。それで、ピンポンを鳴らしました。家の人がすぐに来てくれたので、わたしはお母さんといっしょにわけを話して、何度もあやまりました。その家の人は、「正直にいつてくれてありがとう。きずは小さいからいいですよ。」

と、言ってくださいました。お母さんは何度も何度もあやまっています。後から聞いたら、お母さんは、後でおわびにおかしを持っていったそうです。

わたしは、また同じようなことをしたらイヤだなと思い、こわくなってしまいました。それからずっと乗れなくなってしまうました。

三年生になって、学校で自転車教室が行われることになりました。

「自分の自転車を学校まで持って来られる人はいますか？」と、聞かれました。わたしは、家から学校まで近いので、どうしようかなと思いました。でも、ぶつかったときのことを思い出して、手を上げることができませんでした。

いよいよ自転車教室の日になりました。まず、運動場に出て、友だちの自転車をかしてもらって正しい乗り方を学習しました。つぎに、自転車に乗るためのプリントもんだいをときました。さいごに先生から自転車に乗るときのきまりを聞きました。一番心にのこったことは、

「交差点は左右をたしかめてゆっくり行く」という言葉です。あのときちんとまもっていたら、車にぶつけることはおこらなかつたのになあとつくづく思いました。あい手の人にイヤな思いをさせるだけでなく、自分のお父さ

んやお母さん、家ぞくみんなにめいわくをかけてしまいます。

この夏休みに、おばあちゃんの家まで自転車で行きました。お母さんも後ろからついてきてくれることになりました。乗るのはひさしぶりだったので、だいじょうぶかなと心ばいもあつたけど、自転車教室で習ったことを思い出しながらがんばろうと思いました。ヘルメットをかぶっていざ出発です。わたしの家からおばあちゃんの家は二キロくらいで、どちらも国道の近くです。家から国道までの道がすこしせまいので、何度も通って知っている道だけど、車や人に気をつけて乗りました。お母さんも時々声をかけてくれました。だんだん風が気持ちいいなあと思うようになって、ぶじにおばあちゃんの家に着くことができました。おばあちゃんも、「よく来たね。」

と、言ってくれました。帰りも自転車です。お母さんが、「ゆっくりすぎるときやくにあぶないから、自信をもって乗ってごらん。」

とはげましてくれました。帰りは、よゆうをもって走ることができました。家に帰って安心しました。

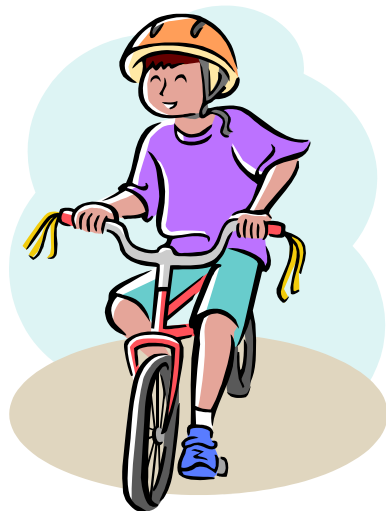
自転車教室の時に、

「松山市自転車めんきょしよう」

をいただきました。これは、正しい自転車用のためのルールとマナーを身につけてもらうために、松山市の小学三年生以上の人がもらうことができるカードだそうです。カードには、赤い字で

「わたしたちは自転車にのるとき、交通ルールをしっかりと守ります。」

と書いています。いつか、コミセンや松山じょうにも自転車でちようせんしてみたいなと思います。それまで安全に気をつけていきたいです。



## たった一つしかない命

西条市立庄内小学校

四年 木原 優衣

毎日、交通事故のニュースがテレビから流れています。そのニュースを見ながら、わたしは、小さいころにひやっとしたことを思い出しました。

それは、わたしが五さいころのできごとです。自転車で遊んでいた時、目の前に急にトラックがあらわれ、一しゅんひかれそうになりました。その時は、すごくこわくて、命が無くなってしまうかもしれないと思いました。今も、その時の気持ちはわすれていません。けがはしなかったけど、とてもこわかったです。助かってほっとしたのと、こわさのあまり泣きじゃくったことを、今でもよくおぼえています。

わたしたちの学校では、毎年五月に交通安全教室がありました。スピードを出したパトローカーがブレーキをかけましたが、間に合わず人形にぶつかる実験をしてくださいました。もし、あれが本当の人間だったら死んでいたんだと思うと、びっくりしたのとこわい思いで声が出ませんでした。わたしも、もしもあの時トラックの運転手さんが、ブレーキをかけるのがおそかったら、人形のようにとばされていたかもしれないのです。

わたしは、これらの体験を通して、「事故ゼロ」をめざしていこうと思っています。そのためには、交差点では、左右をきちんとかくにんをしたり、自転車には正しい方法で乗ったりしなければなりません。横断歩道をわたったあとには、止

まっつくださった運転手さんに大きな声で「ありがとうございますございました。」と感しゃの言葉を伝えることをこれからも続けていこうと思います。そうすることで運転手さんたちも「次から止まろう。」とか、「この道は、よく子ども達が通っているから気をつけよう。」という気持ちになるんじゃないかなと、わたしは考えています。

「事故ゼロ」にするために、もうひとつ考えていることがあります。それは、命を大切にすることを忘れないことです。命は一つしかありません。絶対に落としてはいけません。庄内小学校には、過去に紫雲丸事故という悲しい出来事があり、「命について考える集会」を行っています。そこでは、自分の命は自分でしっかり守るということをみんな考えます。でも、今までは集会が終わってしまおうといつの間にか毎日の集団登校のときに二列になって歩いていることがあります。「これくらいなら大じょうぶだろう。」という気持ちがあるからなんだと思います。

「これくらいなら」という油だんした気持ちは、大きな事故を起こします。死んでしまったら、命はもうもどりません。お父さん、お母さんからもらった大事な命。わたしたちの命は、自分一人で守っているではありません。登下校中に道路に立って見守ってくれる近所の方、いっしょに学校の近くまで歩いてくださる方、横断歩道を安全にわたれるように気を配ってくださるおまわりさん。みんながわたしたちの命をまもってくれています。

朝、学校に出かけるときに、お母さんは、「いってらっしゃい。気をつけてね。」と、いつも言っていて送り出してくれます。

今までのわたしは、この言葉の意味をあまりきちんと考えていませんでした。でも、その意味を知りました。「いってらっしゃい。気をつけて。」には、「交通安全に気をつけて、事故やけがをしないで学校まで無事にいけますように・・・。」と願っているおまじないの言葉だと、家族がわたしに教えてくれました。交通安全教室がある時だけ気をつけるのではなく、いつも交通ルールを守って自転車に乗ったり、登下校をしただけで気をつけていこうと思います。

もう二度とあのときはわすれません。そして、じぶんだけではなく家族、そして地域の方にも、このおまじないの「気をつけていってきます。」の言葉の意味をみんなに広げていきたいです。

交通事故で悲しむ人や悲しむ家族が、この世からいなくなるように、「しっかりと自分の命は自分で守る。」ことを、みんなで気をつけていきましょう。

## 車を運転する人へのおねがい

松山市立北条小学校

四年 横山 璃瑠

私は、家から約五分の所に小学校があります。通学路には、道はばがせまく歩道ありません。また、朝夕は車もたくさん通っていますし、大学生が、道に広がり左がわを通っていることもあり、車一台と人が通ると道がいっぱいになってしまいます。

今年から私は、通学はん長になりました。五人と少ない人数のはんですが、一年生が二人います。私のはんのみんは大じょうぶですが、ほかのはんの下級生を見ているとあぶないということがあります。下級生の中には、列からおくれたり、はみ出したりして、そのすぐ横を車が通っているのととてもあぶないじょうたいになる事があります。今までは学校に行く時自分のことだけを考えて通学していました。しかし通学はん長になってからは、これまでとはちがう立場から交通安全を考えるようになりました。通学路の中で、こわいと思うのは、横断歩道をわたるときと雨の日です。横断歩道の前で一度立ち止まり、左右前後とみんなをかくにんしてかわたります。また、雨の日はかさをさしているためどうしても、道に広がってしまいます。私の通学路は歩道がないので車が来るととまって通りすぎるのを待つこともあります。横断歩道で待っていると、とまってくれる車ととまってくれない車があります。また、道を歩いているととても速いスピードで通りすぎる車もあり、こわいと思ったことも何度かあ

りました。

車を運転する人におねがいがあります。子どもが歩いたり、自転車に乗っている横を通る時は、スピードを少しおとして下さい。また、学校周辺など、子どもが遊んでいそうな場所では、子どもがとび出してこないか注意しながら通って下さい。私たちも、学校の交通安全教室で教えてもらった、安全かくにんなどを十分にしながら生活していきたいと思えます。安全教室で人形で車と人のぶつかる所を見せてもらいました。自分や家族、友達が人形みたいになるととても悲しいです。だから、これからも交通安全を心がけながら、下級生が安心して通学できるように、はん長としてしっかりとがんばって行きたいと思えます。



## 交通事故のない安全な町に

鬼北町立三島小学校

四年 高瀬 まと

私の家の近くには、国道三百二十号線が通っています。わたしたちの班は、この国道を横切って学校に行きますが、三百二十号線は、いつもたくさん車が通ります。そして、車はけっこうスピードを出して走っているのです。私はここで、いろいろな危険なことを見してきました。

ある朝、何台もの車が連なって走っていました。すると、一番後ろの車が、すごいスピードで、前にいる車をどんどん追いついていきました。スピードい反をしていることが、すぐに分かりました。「もし、わたしたちが横断中にこんな車が来たら……」と思うと、ドキドキしてこわくなりました。

それから、こんなこともありました。妹は一年生です。その日は、一年生三人での下校でした。だから、担任の先生がついて帰って下さいました。横断歩道の少し右側にある停留所に、バスは、停まっています。国道三百二十号線を横断しようとした時、バスの後ろから、一台の車ももうスピードで出てきたのです。先生がおられたので、妹たちは助かりました。もしも一年生だけだったら三人は事故にあっていたかもしれません。そう思うと、わたしはとてもはらが立ってきました。その運転手は、「バスの前に人がいるかもしれない」ということを考えなかったのだろうか。交通ルールをもう一度勉強してほしい。」強く思いました。

そして、もう一つ危ないことがありました。妹とお母さん

と散歩していたときのことです。一台の自転車がスピードを出して私たちを追い越していきました。小学生くらいの男子でしたが、ヘルメットもかぶっていませんでした。その子は、車が来ていないか確認もしないで道路を横断し、曲がり角をものすごいスピードで曲がっていきました。わたしは思わず「危ない！」と叫んでしまいました。わたしは、このとき、「車を運転する人も気を付けてほしいけど、自転車に乗る人も交通ルールを守ることは大切だな。」と思いました。

その夜、わたしは、お母さんと交通安全について話しました。お母さんは運転するとき、スピードを一定にして運転する、周囲を確認しながら運転する、「だろろ運転」ではなく、「かもしれない運転」をする、ということに気を付けているそうです。

わたしも自転車に乗るときには、ルールをしっかりと守りたいと思います。

- ・ 自転車に乗るまえにはしっかりと点検をする。
- ・ ヘルメットをかぶる。
- ・ スピードを出さない。
- ・ 一列にならんで走る。
- ・ 道路をわたるときは自転車からおりて車が来ていないかどうか確認し、自転車はおして歩く。

車を運転する人も自転車に乗る人も、歩く人も、みんなが交通ルールを守って、事故のない安全な町にしていきたいです。

## あのときの体験を生かして……

東温市立拝志小学校

五年 永井 寧緒

私は三年生になったばかりのころ、道路に飛び出してしまい、車とぶつかってしまいました。その日はお祭りがあって、友達と大なわとびをして遊ぶことになり、私はなわとびを取りに帰っていました。早くみんなと遊びたくて、なわを取って大急ぎでみんなのところへ行こうとして、左右を確にんせずに飛び出してしまいました。その道は、信号の抜け道になっっていて、時々車が飛ばしてくることがあるところでした。その時はたまたま、近所のおばあちゃんがゆっくり走っていたので、大きなけがなくすんでよかったです。勢いよく車が来ていたら、大けがをしていたかもしれせん。このことをきっかけに、私は、どんなに急いでいてもしっかり左右を確にんするなど、交通ルールをきちんと守るように心がけています。特に、私は登校班の班長なので、集団登下校の時には、班のみんなが安全に登下校できるように気をつけています。班長という責任もあり、みんなを守るようにしたいなと思っています。しかし、少し前のことだけれど、登校中の小学生が事故に巻き込まれてしまうことが相次いで起こっているのをニュースで見ました。その事故は、運転する人が無免許で運転したり、薬を飲んで運転したりしたために起こってしまった事故でした。そんな状態で運転していた人たちのために、何も悪くない小学生が命を落としてしまったと知って、とてもかわいそうだと思います。こんな悲しい事故をなく

すためにも、車を運転する人たちは、もつと気をつけて運転をしてほしいなと思いました。最近では、携帯電話やスマートフォンを見ながら運転している人もいて、こわいなと思うことがあります。

ある日の夜、私のお母さんが運転をして家に帰っていると、運転席の反対側のえん石に乗り上げて、車をぶつけてしまったことがあります。すごいしょげきだったけど、お母さんはシートベルトをしていたので、けがとかはありませんでした。でも、私と弟は後ろに乗っていて、シートベルトをしていなかったもので、ぶつかってしまったし、いろいろなところをぶつけて痛かったです。後ろの座席でも、きちんとシートベルトをしておくことが大事だと思います。最近では、車の技術も進歩して、ブレーキを勝手にかけたり、しょう害物を察知して除けたりできる車も開発されています。でも、だからといって安心せずに、自分できちんと安全に気をつけて運転しないと、いけないなと思います。

今年、愛媛県は死亡事故が増えているそうです。だから、道路を歩いていても、パトカーをよく見かけるようになりました。パトカーを見かけたり、事故のニュースを見たりすると、大丈夫かなと少し不安になります。だから、いままで以上にみんなが交通ルールを守っていけば、事故は減るんじゃないかなと思います。だれも事故をしようと思つて、車や自転車で乗っているわけではないと思います。みんなでルールを守つて、一人一人の命を大切にしていきたいなと思います。

# 交通事故にあつて

八幡浜市立松蔭小学校

五年 伊藤 誠剛

「ガチャン、ガチャンッ！」

すごい音と同時に、ぼくの体は座席の下の方へと転がり落ちました。後部座席でねむっていたぼくは、いったい何が起きたのか分かりませんでした。

「大丈夫？けがしてない？」

母のあわてた声が聞こえました。いっしょに乗っていた祖父や祖母もあわてた様子だったので、大変なことが起きたんだということだけは分かりました。

車内から後方を見ると、とても長い車の行列ができていることに気がきました。そして何よりおどろいたのは、後ろの車の前部分がぐちゃぐちゃになっていたことです。次に前方を見ると、ぼくの乗っている車が、前の車にしようとしていることが分かりました。

「交通事故にあつたんだ。」

ようやくぼくは、大きな音としようげきの原因が分かりました。いつもとちがう母の様子を見ると、だんだんこわくなってきました。

事故に関係した三台の車は、道路の横の広場に移動しました。長い長い行列を作っていた車が、ぼくたちをじろじろと見ながら走り去っていきます。この中には、急いでいる人もいたのだらうなと思いました。事故が起きていなかったら、一分ともかからないようなきよりを、何分もかけて通りすぎ

ていきます。いつまでも続く車の列を見ながら、交通事故は、こんなにもたくさんの人に迷惑をかけてしまうんだなと思いました。

母が交通事故に関係した人と話している間に、ぼくは祖母に事故が起きたときの様子を聞いてみました。前の車が右折するために停車し、それに合わせて母が運転する車が停車したところに、後ろの車が勢いよくぶつかってきたのだそうです。

「雨のせいで前がよく見えなかったことと、車間きよりを十分に取っていなかったことが原因じゃないかなあ。」

と、祖父が言いました。ぼくは、きちんと勉強して試験に合格しているはずなのに、それでも事故は起きてしまうんだなと思いました。

しばらくすると、警察の人たちが来て、母がパトカーの中に入って行きました。ぼくは心配になって、

「お母さん、どうなるの？」

と、祖父に聞きました。

「事情を聞かれよるんやろ。お母さんは停まってただけやから、何も心配しなくてもだいじょうぶよ。」

と、ぼくを安心させるように答えてくれました。ぼくは、少し安心したものの、今度は悲しくなって涙が出そうになりました。

「交通事故って、こんなに人をいやな気持ちにさせるんだな。」  
と思いました。

ずいぶん長い間、ぼくたちは車の中で待っていました。乗っていた車は走ることができず、レッカー車で運ばれていき



ました。ぼくたちは、親せきの人にむかえに来てもらい、そのまま病院へ連れて行ってもらいました。病院では、先生から事故の様子を色々聞かれました。すると、また事故のしゅん間が思い起こされて、悲しい気持ちになりました。

この体験を経て、次の日、ぼくはもう一度交通安全について深く考えてみました。母はルールを守って安全運転をしていたのに、事故にありました。車を運転する人は、全員がルールを守らないと、事故はなくなるのだと思いました。少しだから大丈夫だとか、自分だけは大丈夫だとかいう気持ちは、事故につながるのだと思いました。

ぼくは、よく自転車を利用しています。自転車にも、守らなければならぬ交通ルールがたくさんあります。そういう自分は、どのような自転車の乗り方をしているか、よく思い起こしてみました。例えば、急いでいる時に、長い間待たされる信号機をさけて、道路を横断したり、道路の右側を走行したりしたことがあります。また、細い道から大きな道に出る時、車にぶつかりそうになったこともあります。これらはすべて、「ちよつとくらいなら大丈夫だろう。自分だけは大丈夫だろう。」という気持ちから生まれた行動だと気付きました。つまり、何よりも心がけが大切だということが分かりました。

交通ルールや交通マナーを守ることについては、車も自転車も同じです。大きな事故も小さな事故も、事故は事故なのです。事故を起こすことによって、たくさんの人に迷惑をかけたか、いやな気持ちになったりすることが、今回の経験を通してよく分かりました。ぼくも交通社会の一員として、こ

の気持ちを忘れずに、安全に運転していきたいなと思いました。



## 交通事故をへらしたい

鬼北町立好藤小学校

五年 川添 明日香

私の住む好藤地区の県道で、今年の六月に大きな交通事故がありました。車同士がぶつかって、乗っていた人が亡くなられたそうです。学校の友達の中にも現場を見た子がいて、恐ろしさを話してくれました。私は事故にあったこともないし、現場を見たこともありませんが、ニュースや新聞では毎日のように交通事故の報道があります。一体どのくらいの事故が起こっているのか気になって、愛媛県警察のホームページで調べてみました。すると昨年一年間に県内で発生した交通事故が、なんと六千六百九十二件もあったのです。私は多くても千件くらいかなと予想していたのでとても驚きました。そして、亡くなられた方の数が七十人で、けがをされた方が七千八百六十人もおられることも分かりました。鬼北町の人口が一万一千人ほどなので、それと比べても数の多さが実感できます。本当にたくさんの方が交通事故にあって、悲しい思いやいたい思いをされているんだと感じました。

昨年、交通事故で亡くなった方のうち、四十四人はお年寄りでした。私の祖父や祖母は、もう車の運転はしていませんが、自分がしなくても事故にまきこまれることもあります。いつまでも元気でいてほしいので、数の多さを伝えて、気を付けてもらうように言いたいです。

自転車に乗っていて亡くなった方も十三人いました。私も休みの日に学校に行ったり、友達の家遊びに行ったりする

時に、自転車に乗ります。いつもヘルメットをかぶって、安全には十分に気をつけて乗っているつもりです。でも以前、一年生のころにこわい思いをしたことがありました。

私の学校は小高い丘の上にあります。そのため、学校に行くには坂を上り下りしなければなりません。学校の坂は自転車には乗らず、押して歩くというルールになっています。その時の私も、ルールを守って自転車を押して坂を下りていました。しかしとても急な坂なので、どんどんスピードがついてしまっただけで止まらなくなり、自転車を持ったまま一回転してしまいました。顔とひじをすりむき、血がたくさん出ました。近くの家のおじさんが自転車を起こして助けてくださいました。その時に、どんなに気をつけていてもけがをすることがあるのだということを知りました。

今年の六月までに、県内で起こった交通事故は二千八百五十七件で、亡くなられた方は三十四人です。発生件数とけがをした人の数はへっているけれど、亡くなった人は昨年よりも多いそうです。一度に何人も人が亡くなるような大きな事故が起きているためではないでしょうか。

交通事故を減らして、悲しい思いやいたい思いをする人がいなくなるようにするために私に何ができるかを考えました。まずは、一人一人がルールを守ることだと思います。車にも自転車にも、たくさんの方の交通ルールがあります。これくらいは大丈夫とか、自分だけなら平気という気持ちですが、事故につながるのではないのでしょうか。私は、友達の家早く遊びに行きたくて、左右の確認をせずに道路をわたってしまったことがありました。もし車が来ていたら、交通事故になってい

たと思います。いつもルールを守れるように、心がけたいです。

車の運転手さんたちにおねがいしたいことがあります。それは「やさしい気持ちで運転してほしい」ということです。急いでいたり、イライラしていたりすると、運転がらんぼうになるそうです。学校の通学路になっている県道でも、すごいスピードを出して走っている車をよく見かけます。みんながやさしい気持ちで運転すれば、お年寄りがまきこまれる事故もへるのではないのでしょうか。

愛媛県に住む人みんなが、安全に気をつけてルールを守って生活すれば、事故で亡くなる人の数もへると思います。つらい思いをする人を一人でもへらし、「みんなが愛顔の愛媛県」になるよう、まず自分ができることをきちんとしてたいです。

## 命を守っていくために

西条市立西条小学校

六年 山内 陽日

ザザー。ガツシャーン。朝、わたしが、学校へ登校していると、バイクがすべって、木にぶつかるといふ事故がありました。バイクの一部がとれていてひどい状態でしたが、運転手は無事だったそうです。わたしは、学校に着いてからそのことを友達と話しました。危なかったし、なにしろいきなり起こったのでびっくりしました。私の身の周りでも、事故は、次々と起こっています。そのため、自分の身は、自分で守らないと、わたしも、事故を起こしてけがをするかもしれないので、次の四つのことを、特に注意しようと思います。

一つ目は、信号無視をしないことです。車が来てないから大丈夫と思って、赤なのにわたってしまったと、急に車がきてしまうかもしれないからです。実際に、わたしの妹も、信号無視をしてしまったことがあります。そのときは、来ていた車が止まってくれていたために事故は防げましたが、あのときは危険だったと、いつふり返っても思います。やはりきちんと注意していなくては、いけないと思いました。

二つ目は、左右をしっかり見ることです。小さい頃からいつも、信号が青になったら、右、左、右と確認してから信号を渡るようにと言われてきたし、この頃は車の方も、信号が青になったら周りを確認しない運転手が多いと聞きますから、歩行者は、左右をしっかり気にするべきだと思います。

三つ目は、自転車に乗るときは、ヘルメットをかぶること

です。わたしは、現在、コーラス部に所属しており、学校で  
ある土曜日の練習や夏休みの練習は、いつも自転車で行って  
います。通学路の通り行くと、信号が三つあります。二つは、  
交通の多い道路のすぐ近くで、一つは、その道路を横ぎって  
いかなくてもなりません。朝、いつもは歩道橋がありますが、  
自転車のためそこは渡れません。そこは、車が多く、渡って  
いると、こっちを見ていないんじゃないかという車がたくさ  
んいます。でも、しつかりヘルメットをかぶっていると、安  
心ですし、万が一、事故にあっても頭を守ることができま  
す。自転車は歩くときよりも、とても速いため一瞬の判断で、命  
とりになると思います。なので、ちゃんと自分のできる、ヘ  
ルメットをかぶるなどは、しつかり守るべきことだと思いま  
す。

四つ目は、飛びだしをしないことです。わたしは、よくボ  
ールを追いかけて、子どもが急に飛びだしをして、事故にあ  
うというのを防ごうというコマースシャルをテレビで見たこと  
があります。また他にも飛びだしのことについて話している  
のを聞いたり見たりしたことがありますか。なので、わた  
しは、どんなに急いでも周りを確認したいです。それに、飛  
びだしは、車だけでなく、自転車とも起こる事故です。自転  
車にも気を付けなくては、いつ、自分の身に危険なことが起  
こるか分からないので、どんなに急いでいても、飛びだしは、  
してはいけません。

わたしは、この四つのことをこれからも、守れるよう努力  
していきたいです。わたしの守りたいことは、とても、簡単  
で、そしてあたりまえのことですが、それでも、守り続ける

のは難しいと思います。そして、それを次の世代へ残してい  
く、これも、また難しいと思います。でも、わたしたちが、  
事故にあわないためには、あたりまえのことをあたりまえに  
する。自分の身はきちんと自分で守ることが、やはり、事故  
にあわない一番のやるべきことだと思えますし、それができ  
るなら次、また新しくまもらなくてはいけないことを考えて  
自分の身をしっかりと守れるようになっていきたいです。また  
大人になっても、この気持ちを忘れてしまわないように自分  
の心に、しっかりとときざみこんで、わたしがしっかりと守つ  
てきたことを伝えたいし、また、自分の身近にいる人にも、小  
学校、高学年として、低学年に、しっかりと教えていきたい  
です。

## 子どもの事故をなくすために

内子町立内子小学校

六年 沖野 文華

私は、子どもの事故のニュースを聞かされたときに、みんなに訴えたいことがあります。

私の通っている学校は、毎朝集団登校をしています。私は班長なので、私を含む六人の命を毎朝連れて歩き、預かっています。その中で、私がいつも気をつけていることがあります。

まず、車が近づいた時の対応です。私たちの地区は、商店街に面しているので、車の往来が多いです。だから、車が来たときは、その場に止まって車が通り過ぎるのを待って歩き始めるようにしています。

また、道路を横断する十字路口では、必ず前後左右を確認してから渡るようにしています。班長旗を出し、全員が渡りきったのを確認するようにしています。毎朝のことですが、責任を持ってやろうと頑張っています。

また、私は自転車競技の練習もしました。地区大会では二位で、県大会に出場しました。県大会は惜しくも三位でしたが、自転車練習は大会の結果より、学んだことがたくさんあると思います。それは、自転車のルールがあり、それを守って自分の命を守ることと、プレッシャーにつぶされても、そのときに出せる自分の力を精いっぱい出す、ということだと思います。とても緊張しても、自分の力を出しきれば結果につながるし、その雰囲気におしつぶされそうになっても、いっしょ

に練習した人達のことを思えば、はげみになり、勇気づけられるということでした。練習をしたことも大会に出られたこともとてもいい経験になりました。

自転車練習をしたことで、私は普段の自転車の乗り方にも気をつけるようになりました。それは、自分が道を曲がるとき、後ろから自分と同じ方向に曲がる車がないかを確認することです。その理由は、内輪差で車の後輪に自分が巻き込まれる可能性があるからです。その他にも自転車で乗るときに気をつけることはたくさんありますが、自転車練習をしてこの事を知ったことは、大変よかったです。

歩いていても自転車に乗っていても、私は、「車が止まってくれぬから大丈夫」と思うのではなく、「車は止まってくれぬか分からないので、自分から止まっておく」ということも意識しておかなければならないと思います。車を運転している人はみんなが優しい心で余裕をもって運転しているとは限りません。渡ろうとしている人を見ても、そのままアクセルを踏み込む人もいると思うからです。

私たち子どもは、車の運転もバイクの運転もしません。だから、運転する人のマナーや運転の方法が正しいと事故は起こらないと思いたいですが、事故は起こります。そこで、私たちが意識して事故を防がなければならないということが分かります。

交通安全教室で自転車の乗り方や横断の仕方などは毎年勉強するし、自転車練習に参加すると、交通ルールを詳しく知ったり、自転車運転の技術を向上させたりすることができます。そういう交通ルールを、まずは私たち子どもがしっかり

と意識して守るようにならなければならないと思います。私が車の内輪差に気をつけようとしているように、自分で自分にあったルールを作り、それを守ろうとみんなが努力したらいいと思います。自転車やバイクに乗る人にも気をつけてほしいと思います。私たちが子どもの気持ち一つで、車やバイクの事故に巻き込まれる可能性は大いに減ると思います。

交通事故が0になるように、少しでも交通事故が減らせるように、まずは、私たちが子どもが自分で守るルールを決め、それに気をつけることが大切です。そして、事故をなくし、命を守ることを忘れないようにしたいです。



## 【中学生の部】

### 思いやりの心を持って

四国中央市立川之江北中学校

一年 重見 昇吾

僕が小学五年の時、父が交通事故で亡くなりました。高速道路の合流地点で、トラックの無理な割り込みによる車線変更が、他の車の進路妨害になり、それに巻き込まれた結果の事故死でした。まだ四十三歳で、仕事も頑張っていて、僕とも色々な事をしたと言っていた父が、どうして死ななければいけなかったのか？僕はいつもその事を考えます。あの時、トラックが合流地点での無理な車線変更なんてしなかったら、父は今、僕と母の隣で笑っているはずです。なぜ、合流地点での無理な車線変更を、あのトラックの運転手はしたんだろ。そんな事をしたら危険だから、いけない事だとわかっていたはずなのに……。交通ルールをちゃんと守っていれば防げた事故だったのに……。なんで？なんで？この二年間、僕はずっと考えています。

中学生になって、自転車で行動することが多くなり、交通量の多い所を自転車で走らなければいけない時もあります。そうして気付いた事は交通ルールを守っていない人がたくさんいるということです。信号が黄色から赤色に変わる時に、

猛スピードで突っ込んでくる車。歩道があるのに車道を歩く歩行者。横断歩道のない所を横断する人。歩道を自転車で通行する人。自転車で二列三列になっておしゃべりしながら走っている人。車の助手席に座っている時も、無理な割り込みにひやっとしたり、安全確認をせずに飛び出してくる車や、歩行者をよく見かけます。

そういった人達は、決して交通ルールを知らないわけではないと思います。なぜ、そういった事をしてしまうのか。それは、きっと自分さえよかったらいい、これくらいのこと大したことないだろう、という自分勝手な気持ちからだと思います。思いやりの心がないからだと思います。悲しいことだけれども、そういった人がたくさんいるのです。そういった人達は、もし自分や自分の大切な人が、交通事故の加害者や、被害者になってしまったとしたら、それまでの生活ががらっと変わってしまうことを知ってほしいです。父の事故以降、僕の生活はがらっと変わりました。その前の日まで、そんなこと想像すらしていなかったのに、たった数秒の出来事が原因で、僕の生活、僕の人生はがらっと変わってしまったのです。無理矢理に変えられてしまったのです。だから、悲しい気持ちと一緒に怒りの感情もいつも僕の中にあります。思いやりの心のない人達に、いつも怒っている僕がいます。

でも、そんなことを言っている僕も以前、見通しの悪い道を、自転車でスピードを出して走っている時に、ミニバイクとぶつかってしまった事があります。見通しが悪くて、危ない道だということは分かっていました。でも自転車でスピードを出して走ることが面白いからという、安易な気持ちが起

こした事故でした。僕もミニバイクの人もけがはなくてすみましたが、周りの人達にたくさん迷惑をかけてしまいました。

特に父を亡くしたばかりの母は、とてもショックを受けていました。心配をかけてしまって、本当に申し訳ないことをしたなと思いました。天国の父も怒っているかなあと思ったりもしました。父の事故に怒ってばかりで、自分は思いやりの心を持っていたかなと、はずかしくなりました。

自転車を、スピードを出して走らせると気持ちいいし、友達と話しながらだと、ついつい自転車が二列三列になってしまったり、急いでいるから赤信号でも止まらず行っちゃえ！と思ったり、そう考えてみると、どれも自分のことしか考えてない行為です。楽しければ…。人間はその事に目がいきがちですが、つらい経験をした僕だから、言えることがあると思います。自分の事の前に、他の人の事、自分の大切な人の事を考えてほしいです。加害者にしろ、被害者にしろ、悲しむ人がいるということを知ってほしいです。

これから僕は、自転車を使って移動することも多くなるし、大人になると、車やバイクに乗ることになると思います。時間がなくてイライラして、信号無視をしてみようか、面倒くさいから横断歩道のない所をひょいっと渡っちゃおうか、友達と話していると楽しいから、自転車で二列三列で走っちゃおうか…。そんなとき、色々な場面で僕は父の顔、母の顔、祖父母の顔を思い浮かべようと思います。僕には、大切な人がたくさんいるのですから。

もう僕のように悲しい思いをする人をつくりたくありません。

ん。どんな人にも悲しんでくれる人や、大切な人がいます。ドライバーのみなさん、思いやりの心をもって運転してみてくださいませんか？自分の大切な人のためにも、他の人のためにも…。





## 交通事故から思うこと

今治市立吉海中学校

一年 堺 大起

僕は、交通事故が大嫌いです。理由は、被害者も加害者も、事故の後のつらい思いでいっぱいになるからです。

僕の母のいここにあたるお婆さんは、大阪に住んでいます。二十年くらい前、バイクに乗っていて交差点で事故に遭い、それからずっと車いすで生活しています。最初の二年間はベッドの上から動けませんでした。それから、少しずつリハビリを始めて、五年目くらいで、歩行器を使ってどうにか歩けるようになりました。三年くらい前から、やっとなつとつえと補助器具を使って何とか歩けるようになりました。でも、ほかにも後遺症が残っていて、会話はできません。だから、自分の意思を誰かに伝えることはとても難しいことです。人とのコミュニケーションがとりづらく、自分の生活はもちろんですが、介護をするまわりの人もとても大変です。

事故は、本人同士だけでなく、その家族もまた生活が一変してしまいます。二十年たった今でも、いろいろなこととお婆さんの家族はとても忙しそうです。

僕は、年に一・二回、お婆さんに会いに大阪に行きます。話しかけると、最近は笑ってくれるようになりました。でも、それは僕の話が分かって笑っているのかどうか、実際には分かりません。僕は、生まれてから一度もお婆さんの声を聞いたことがありません。だから、一度ゆっくりとお婆さんの声

を聞いてみたいのです。

テレビや新聞などでは、毎日のように大きな事故があったというニュースが流れています。僕たちはつい、それはテレビの中だけの出来事だと思ってしまう。けれども、本当はそうではなく、誰にでもいつどこでおこるかわからない身近な出来事です。

僕は、ときどき、横断歩道のないところをシルバーカーを押しながら渡っているおじいちゃんやお婆あちゃんを見かけます。そんなとき、すごく怖いなと思います。おじいちゃんやお婆あちゃんたちは道路を一気に渡りきれないので、車に引っかけられそうになったり途中で転びそうになったりする場面にたまに出あいます。また、保育園の近くでは、小さな子どもが急に道路に飛び出てきたりします。

そして、僕の住んでいる吉海町は、しまなみ海道のサイクリングロードの中にあります。今年「しまのわ」の行事もあるのですが、たくさんの方がサイクリングを楽しみにきています。そんな人たちの中に、二列になって走る人やヘッドホンをつけたまま自転車に乗っている人を見ます。

これらのことは、とてもよくないことだと思います。こうした人たちが車と交通事故を起こすと、車の人が悪いと言われます。けれども、歩行者や自転車に乗る人のマナーや交通安全についての意識をもっとしっかりとすべきだとも思います。

さらに、僕の父はこんな経験をしました。自動車を運転しているとき、向こうから自転車で乗った小学生の男の子とバスがやって来ました。バスが曲がろうとした時、自転車は車道

側にハンドルをきってバスをよけようとなりました。そのために、父の車と接触してしまったのです。父はスピードを落とすしていたこともあり、男の子のけがが大きくなかったことが幸いでした。それ以降、父はその時と同じ時間に運転したり、同じ道を通ったりすることや、バスとすれ違ったりする時は、人や車がかげから飛び出してこないだろうかと思つて、とても怖く心配になるそうです。だから、それまで以上に安全を意識して運転していると話してくれました。

母のいとこや父の話、自分が見たり聞いたりしたことからは、僕は、交通事故は、自分がどんなに気をつけていてもそれだけでは防げない、すべての人が同じ気持ちで安全を守つていかなければいけないのだと分かりました。そのためには、みんなが交通安全についてしっかりと勉強し、それを道路に出た時に実行することが大事だと思います。交通事故で苦しんだり、悲しんだりする人が出ないような社会を、僕たちがつくっていききたいです。

## 交通事故のつらさ・願い

八幡浜市立双岩中学校

一年 菊池 萌香

私の家族に、交通事故に遭った人がいます。それは父です。父から事故当時の話を聞く度に、とても胸が痛くなります。

十年前の九月、父は仕事場から家に帰るため、知人の運転する車の助手席に乗っていました。そんなとき、あの悲しい事故が起きたのです。携帯電話を使いながらよそ見運転をしていた後ろの車が、父の乗っていた車に勢いよく追突しました。一瞬のできごとでした。自分の身に何が起きたのか、すぐには状況を把握することができなかつたそうです。ぶつかった衝撃で父の車は助手席側に横転しました。それによって、開けていた車の窓から父の左手だけが外に投げ出され、乗っていた車の下敷きになりました。さらに、車は横転した状態で父の左手を下敷きにしたまま走っていくように走っていききました。そのため、父の左手は血だらけで、三本の指の骨が皮膚から飛び出て、手がにぎりこぶしのような形になってしまいました。もう少しで手が切断されるところでした。あまりの痛さに、父は隣に乗っていた人に車を起こすように頼みました。父はけがの痛みで、叫んだり、歯を食いしばったり、泣いたりしました。少しして、事故現場に救急車、消防車、パトカーがかけつけました。そのまま父は救急車で病院に運ばれ、すぐに手術を受けました。父は、事故から三ヶ月の間入院しました。こんなにも長い間入院して治療を受け続けましたが、父の左手が元の状態にもどることはありませんでした。

た。

父は、大工の仕事をしていました。でも、この事故で仕事を続けることができなくなりました。大工の仕事はできなくなってしまうけれど、命に問題はなかったことや、元の左手ではないけれど、まだ父の左手が残っていたことはほんとうによかったと感じています。しかし、父はこの事故が原因で、とてもつらい思いをしました。交通事故で人生が大きく変わってしまったのです。

そして、つらい思いをしたのは、父だけではありません。一番つらかったのは父ですが、私たち家族もとてもつらい思いをしました。母は、父が事故に遭ったと聞いたとき、頭が真っ白になったそうです。私は当時まだ二歳で、その時のことをはつきりとは覚えていませんし、父が事故に遭ったことをきちんと理解できませんでした。でも、中学生になった今、事故の話を聞くと、とてもつらく悲しい思いでいっぱいになります。父は事故が起きてから十年で十回以上の手術を受けてきました。今でも父の手は治っていません。父の手を見るたびに、とても悲しい気持ちになります。父だけでなく、母、弟、私、祖母など周りのみんなが父の事故を知って驚き、とてもつらい思いをしました。このように、交通事故は本人だけでなく、周りの人もつらく悲しい思いをするので、ほんとうに怖いです。

父はこの十年間、事故による心の痛みや手の手術の痛みに耐えてきました。そんな父はほんとうにすごいと思います。でも、お医者さんからは父の手はこれ以上治らないと言われています。十年たった今でもまだ手術を受けなければなりません。

せん。今年の十月にも、また手術を受けます。今でも、事故に遭ったのがなぜ父なのかと思うときがあります。後ろの車はどうして運転しながら携帯電話を使ったのかという思いもあります。交通事故はいつ誰に起こるかわかりません。予測できないものだからこそ、普段から安全に気をつけて生活していく必要があります。この意識を一部の人ではなく、全員が持ち続けることが大切です。

日本では、交通事故によって年間多くの人が命を落としています。テレビや新聞では、交通事故のニュースをよく目にします。父は交通事故に遭いましたが、生きています。幸運にも命は助かりました。私は、父の事故を通して感じたこのつらく悲しい気持ちを一生忘れません。そして、事故に遭った人の苦しみや、その周りの人たちのつらさを知っているからこそ、父や私たちと同じような思いをする人を増やしたくありません。みんなが安全に毎日を過ごすためにも、まずは自分自身が交通ルールをしっかり守ってほしいと思います。自転車の乗り方や道路の歩き方など、自分の生活を振り返りながら、もう一度考えていきたいです。そして、交通事故で命を落したり、けがをしたりして悲しい思いをする人が一人でも減ってほしいです。また、私だけでなく、一人一人が交通ルールを守って安全に生活していくことで、事故の起こらない温かな社会が実現できると思います。これからも、みんなが笑顔で生活できる安全・安心な社会を私たちの手でつくっていききたいです。

## 自分を振り返って

八幡浜市立愛宕中学校

一年 玉岡 真愛

私は、日頃から交通安全に努めている。中学生である私の主な交通手段は、自転車と徒歩である。中学校への通学は徒歩だが、塾や遊びに行くときは自転車を利用することが多い。だから、安全な自転車の乗り方について考えてみた。

今年夏休みに入って、衝撃的な事故を目にした。たまたま見ていたテレビニュースで知ったのだが、私が住んでいる町に近い町で起きた自転車と乗用車の交通事故だ。自転車に乗っていたのは私と同じ年の女子中学生であり、普段私も買い物などで家族とよく通る道路で起きた事故だった。そのニュースを聞いて、強いショックを受けた私は、どうか彼女が助かってほしいと祈った。幸い、その生徒は回復していると聞いた。自転車でプールに行く途中、事故にあったそうだ。いつもの私と同じように、自転車に乗って通り慣れている道で起きたことだ。私には詳しい事故の原因などは分からないが、十分に気をつけていても、事故に巻き込まれることもある。家族の方の気持ちを思うと、何ともやりきれない気持ちでいっぱいになった。

交通事故は、被害者も加害者も一生、心に深い傷を負う。それだけでなく、周りの人までも不幸にしてしまう。もし、私が事故にあつたら、家族、親せき、友達、先生などみんなが傷つき、悲しい思いをするだろう。そんなことはしたくない。

私は、小学六年生のときに自転車大会に参加することができた。この大会は、学校ごとに担当が決まっていて、九年に一度しか参加することができないそうだ。とても貴重な経験になった。その中で学んだことが二つある。

まず、「安全走行」について正しい考えを学んだ。それまでの私は、スピードの出しすぎなどを全く気にせず、自転車に乗っていた。立ち乗りもするし、スピードも出すということが当たり前になっていた。「スピードを出すと危ない。」と頭では理解していても、「このくらい大丈夫だろう。」と自分勝手に判断していた。スピードを出す人が、自転車の運転が上手だと錯覚していたのだ。F1レーサーの人が「上手な人こそ、余力を残して運転する。何が起きても対処できるから。」と話していたと聞き、私の認識の甘さを痛感した。今では、ゆとりを持って安全運転ができていると思う。

二つ目は、学科試験で交通ルールの基礎知識を学んだことだ。交通標識はもちろん、自転車の仕組みや点検の仕方、交通の決まりなどを知ることができた。点検の時には「ぶたとしゃべる」という言葉を覚えておくといいそうだ。「ブレーキ」「タイヤ」「灯火（とうか）」「車体（しやたい）」「ベル」の五つを、乗る前に毎回確認することが大事だ。なぜその場所を点検しなくてはいけないのか、という理由と正しい点検の仕方を教えてもらった。今では、自転車に乗る前に欠かさず点検している。

このように、自転車大会に出たことで学んだことはとても多かった。今年、中学校に入学して行われた自転車教室でも、そのときの経験を生かすことができた。小学校までの私なら、

「行事だから」という気持ちで参加していただろうが、今回は積極的に学ぶことができた。

自転車事故は毎日、日本全国で起きている。交通事故数の二割が自転車事故だ。そして、その八割が自動車との事故だそう。なかでも、出会い頭、右左折時の衝突事故が多い。どれも、互いに安全確認を十分におけば防げていたかもしれない事故だと思う。私も事故を起こすかもしれないし、事故に巻き込まれるかもしれない。

最近、「ながらスマホ」など、前を向かずに自転車に乗っている高校生を見かける。「自分は大丈夫」と安心していろいろだろう。しかし、この油断こそが事故の一手前なのだ。私は思う。また、中学生では、自転車で二列走行をしている人たちもいる。以前は私もその中の一人だった。弟と二列で走っているときに、ぶつかりそうになったこともある。「危ない。後ろ行ってや。」と弟に八つ当たりしたが、今思えば、私も悪かったのだ。事故が起きるのには、必ずだれかの危険な行動が関わっている。だからこそ、一人一人が自分の行動を振り返り、安全な走行を実践していくことが大切だ。「自分の命は自分で守る。」をしっかり頭の中にインプットしていかなければならない。

毎日の生活の中で「危ないなあ」と思ったときが、自分の行動を振り返る良いチャンスだと思う。この作文を書いたことで、改めて命の尊さについて考え直すことができた。大切な家族を悲しませることがないように、これからも事故に十分気を付けて安全に自転車に乗りたいと思う。

## 私の交通安全の基本

西条市立東予東中学校

二年 竹中 侑衣

中学校に入学して間もない頃のことだ。私は中学から始まった自転車通学にまだまだ慣れていなかった。新しいびかぴかの自転車はうれしかったけれど、少し高めのサドルで足はやっと地面に着く程度だ。それに、勉強道具が入ったカバンは重い。かごに入れても、背負ってもなかなか安定して自転車を運転することはできない。

また、通学路にも慣れていなかった。道順はもちろん、どこが危険で、どこが安全かもよくわからない。何より小学校のころには無かった、大きな路を横切るための信号つきの横断歩道もあった。この信号は赤の時間が長い。二分くらいまたされたあげく、青の時間は数秒だけという少し不公平な信号だ。いつも退屈に信号を待つことの方が多い。

ある日の部活の帰り、その横断歩道に近づいたときに、信号が青になるのが見えた。私は「ラッキー！」と思い、交差点に向かって全速力で自転車を走らせた。そのとき、黒い車が横から曲がってくるのが見えた。私は驚いて、少し止まった。すると、黒い車の運転手さんが手で「どうぞ。」と示してくれた。信号は青だったし、ここは横断歩道だ。私に気を遣ってくれたのだと思い、私は小さく会釈をして急いで横断歩道を渡った。なんだか少しうれしかった。

次の日もその次の日も信号は青だった。車はまた止まってくれた。私はなんだかとてもいい気分になった。いつしか私

の中では「横断歩道を自転車で渡っていると車は止まってくれる」ことが当たり前になっていった。

それから一ヶ月ほどたったある日。いつも通りの部活帰り。いつもの横断歩道。そして、その日も信号は青だった。私は自転車の速度を上げた。ところが、その日は渡ろうとした瞬間、信号が点滅を始めたので、私はいつそう速度を上げた。半分以上渡ったところ、横から白い車が曲がってくるのが見えた。私は少しだけ速度を緩めたが、横断歩道を渡ることをやめなかった。今日も車が止まってくれるはずだと思っていたからだ。

しかし、白い車は止まるどころか、みるみる私の方に近づいてきた。「どうして止まらないの？」という思いが一瞬浮かんだが、私は自転車を止めることもできず、あわてた。車はどんどん近づいてくる。「このままではぶつかるといふ距離まで車が近づいた時、私はその車の運転をしている人の顔を見た。その人もやっと私に気づいたらしい。目が合った。そして、車はびたっと止まった。

おそろおそろ左足を見ると、車との距離は十センチくらいしかなかった。何が起こったのかよく理解できないまま、私はふらふらしながら自転車をこいで横断歩道を渡りきった。振り返ると、白い車は何事もなかったかのように走り去った。怖かった。私はしばらくドキドキしていた。

私は、やっと思い出した。横断歩道を渡るときは、左右をしっかりと見ること。信号が点滅し始めたら、余計に安全確認をしなくてはならないこと。何より、車は必ずしも止まってくれるとは限らないこと。……小さい頃からずっとそう教

わってきたのに、私はそんな当たり前のことを忘れてしまっていた。数ヶ月前まではしっかりと安全に登校できていたのに自分が知らない間にいつ、何処で間違えたのだろうか。

家に帰って母にこのことを話した。すると、「事故に遭わなくてよかった。でも、横断歩道はしっかりと注意をして渡ってね。そして、このようなことを繰り返さないことだよ。しっかりと覚えておいてね。」と言った。この出来事があってから、私は母に言われたように、横断歩道を渡るときは気をつけておこうと思った。

今起こったことは交通事故ではないけれど、あと一歩間違えていれば本当の事故に遭っていたかもしれない。何度も横断歩道を渡っていくうちに、私の中に油断や思い込みが生まれ、交通安全への意識を失っていったのだ。

事故に場所や時間は関係ない。横断歩道を渡るときは左右をしっかりと見て渡ること。信号をよく見てちゃんと安全確認をすること。車は絶対止まってくれないとは限らないので注意すること。……全部基本のことだけれど、その基本を忘れたとき、交通事故はやってくる。交通安全は基本を守ることそのものだと私はやっと理解した。

私は横断歩道を渡るときだけでなく、道を通る時は油断や思い込みをなくし、交通のマナーの基本をしっかりと守り、今回のようなことは二度と繰り返さないようにしようと思心誓った。私にとっての交通安全の基本は、なによりも「この出来事を忘れない」ことだと思う。

## 母の「気をつけてね」

伊予市立伊予中学校

二年 阿部 美菜実

車に乗る時。

「シートベルトした？」

友達と遊びに行く時。

「飛び出さないように、左右確認ね。」

などと、母はいつも言います。そして最後には「気をつけてね。暗くなるから〇時には帰ってきてね。」と付け加えます。素直に聞くべきだと分かっているのですが、「小学生じゃないんだから、それぐらい分かるよ。」と、最近の私は母の言うことが、うるさく感じるようになっていました。

しかし、そんな考えを見直さなければいけないと思う出来事がありました。知り合いの娘さんが交通事故にあったというのです。自転車で遊びに行っていた途中、スピードは出していなかったのですが、ちょうど回りが見えにくい道で車にぶつかり、飛ばされてしまったそうです。命に別状はなくよかったです。頭の骨を折る大怪我で、しばらく意識が戻らない状態だったそうです。自分の回りにいる人が交通事故故にあったという話は初めてで、衝撃を受けました。その話を聞いて、交通事故がどれだけ身近にあるものなのか、恐ろしいものなのかを初めて理解できたような気がします。同時に母の言っている言葉の意味が分かってきました。

車を運転している母は、隣に座っている私に、目の前を通っている歩行者や自転車に乗っている人の特徴を語り始めま

す。特に自転車のことについてが多いです。二人乗り、右側通行、携帯電話をしながらの運転、道一杯の広がり、飛び出し、無灯火など。どれも、してはいけないことですが、意外としている人がたくさんいることに気がつきます。ですが、これは、車側の視点で気がついたことです。皆してはいけないことだと分かっているはずですが、なに、なぜ交通マナーが守れていない人が多いのか。「自分が事故にあうはずがない」そう思っている人が多いのではないのでしょうか。無意識のうちにやっつけてしまっていることだと思います。私も今まで完璧に交通マナーが守れていたとは言い切れません。

そこで私は、父に車側からの視点で自転車はどのように見えているかを尋ねてみました。すると、第一声が「とにかく危ない。マナー違反が多すぎる。」とのことでした。内容は母の言っていたことと同じで、横断歩道ではない所をいきなりヒュツと横切られるのが一番恐いと言っていました。母と父の話聞く限り、自転車に乗る一人一人の責任感があまりにも少なすぎると思います。確かにバス、飛行機、船、電車など、お客さんの命を預かる運転手さんの方が責任を強く感じがちです。しかし、事故が起きる可能性、事故が起こると失うものは同じです。だから、自転車にしろ、車にしろ、飛行機にしろ、責任の大きさは全て同じにしなければいけないと思います。父は父なりの責任で自転車の横を通る時は、必ずゆっくり通るようにしているそうです。私たちの身の回りには自分自身の視点だけでは、気がつかないことが沢山あります。私も違った視点から見て、自分の行動は合っているのかを考えられるようにしていきたいです。

次に自転車事故について調べてみました。日本損害保険協会によると、全国で昨年の自転車による加害事故はなんと三万件。死傷者数は十二万人にも上ります。年々、少なくなってきたようですが、まだまだ多いです。もちろん乗り物に乗る限り、責任を持つことや、マナーを守ることは基本中の基本です。では、具体的に何をすればよいのでしょうか。事故を起こす主な要因は、安全不確認、一時不停止だそうです。その中で、事故件数減少の一番の近道は「右、左、右」を確認することだと思います。これは幼稚園児の頃から教えてもらい、誰もが知っていることです。ですが、できていない人が沢山いるため、飛び出しや一時不停止による事故につながるのです。あたり前のことはあたり前にする。このことは、長い間の慣れによるものなのか、注意する人が少なくなっていく、簡単なようで簡単ではありません。初めはこんな小さなことで良いと思います。初心に戻って小さなことを皆が実行していけば、それがどんどん広がっていく、事故ゼロに近づいていくのではないのでしょうか。

「自分は大丈夫」やはり、そう思いがちです。私も前まではそうでした。交通事故については、ニュースなどでしか聞く機会がなかったため、どこか他人事のように聞いている自分がいきました。しかし今回、自分の身近に意識する出来事があり、多くのことに気がつきました。交通事故にあらう可能性は誰にでもあります。時には加害者になることも。「気をつけてね。」という母の言葉には、沢山の意味や願いが込められていることに、ようやく気がつきました。母のおかげで、私は事故を起こさず、生きてこられたのかもしれない。

## 命を守るためにできること

八幡浜市立愛宕中学校

二年 松浦 希緒

新聞やテレビのニュースでは、愛媛県内でも、交通事故に関する内容が取り上げられているのを毎日耳にする。車同士の衝突や、歩いているお年寄りや小学生が被害者になることも少なくないようだ。

私が住んでいる八幡浜市はフェリーが寄港する港があるので、県内外の車や貨物トラックが往来している。さらに、ここ数年間で新しい道路が開通したり、魚市場周辺の開発が進んだり、大型スーパーができたりに、交通事情が大きく変化してきている。車道が拡張されると走りやすいのか、スピードを上げる車も増えている。八幡浜市の開発が進み、発展することはとても望ましいことだが、それに伴って危険が増えることも忘れてはいけないと思う。

中学校に入学した今は、家と学校が近いので、登下校時に危険な目に遭うことはほとんどない。小学校に通っていた頃は、距離が長くて危険な場所もあった。しかし、地域の方が毎日私たちの登下校を見守ってくださり、安全に過ごすことができた。

このことを考えるとき、必ず思い出す人がいる。それは「白浜安全パトロール」の「川本さん」という方だ。川本さんは、校区に住んで、理髪店を営んでいる方だ。ご自分のお子さんも通っていた地域の小学校、中学校の子どもたちが安心して学校に通えるようにと、何十年間も朝の登校を見守ってくだ



さっている。登校の見守りだけでなく、自ら大きい声であいさつをし、声が小さければ、

「大きな声であいさつせよ。」

とか、気になる子には、

「昨日は、休んどったが、元気になったか。」

などと声をかけてくださる。スピードを出して走る車やバイクは、厳しい顔で制されることもあった。川本さんのように、わたしたちを見守ってくださっている地域の方の気持ちやその行いに改めて感謝したいものだ。

中学生になり、自転車教室を二度経験した。昨年は、実際に運動場のコースを自転車で走り、実技訓練を行った。そして、今年度は、交通ルールについて改めて学んだ。小学生のころから、何度も経験してきているが、自転車教室で理解したつもりの知識や、当たり前にできると思い込んでいた自転車の運転の技能が、実際に公道を走るときになると、生かされていないことに気付くことがある。

普段は、あまり自転車を利用しないが、一学期に行った職場体験活動へ、自転車に乗って出かけた。車のすぐそばを通る時、歩行者を追い越して走る時、見通しの悪い角を曲がる時など、どきりとしたことが何度かあった。普段、乗り慣れないせいか、自分の運転技能にも自信がなく、前を見るのがせいっぱいだったように思う。特に、雨が降っていた三日目は、前も見えにくく、車輪がすべりそうで、どきどきしながらペダルをこいだ。このような経験から、私は、危険はいつ、どこに、ひそんでいるかわからないということを痛感し、注意の意識を今までよりも高めた。

自分が自転車にのっている時だけでなく、自分が歩行者として道を歩いている時に、信号無視の車を見かけることもある。そういう場合は、ついつい他人事に思ってしまうが、自分が自転車を運転している場合には自分が加害者になることもある。反対に、歩行者の場合は、被害者にもなりかねない。ちよつとした油断や、交通ルールを守ろうとする意識の低下によって、自分が加害者にも被害者にもなりうるのだ。自分がどんなに気を付けていても、交通事故に遭遇することも考えられる。

だから、自分自身はもちろんだが、住民一人一人が共通して意識を高め、交通ルールを厳守しなくてはならないと思う。特に、そう感じるのは、大人の飲酒運転のニュースを聞くときだ。これまでも、アルコールを摂取して運転したがために、悲惨な事故を招いたというニュースが何度も報道されているのに、交通事故が後を絶たないのは、無責任な運転、自分は大丈夫という過信が原因だと思う。それらは、被害者を生み、その命やその家族の幸せを奪ってしまう。また、加害者のその後の人生をも狂わせてしまうと聞いたことがある。ドライバーは、それらのことを肝に銘じてハンドルを握ることが大切だと思う。そして、誰もが飲酒運転に対する認識を持ち、危機意識を高め、飲酒運転がなくなることを願う。

私も将来、運転免許を取り、ハンドルを握るときがくるだろう。そのときは、責任をもって運転できる人間になりたい。そのためにも、中学生である今も、友達と歩くとき、自転車を運転するとき、その状況に応じて、交通ルールを守り、責任をもって生活できるように気をつけていきたいと考えてい

る。そして、八幡浜市はもちろん、愛媛県から交通事故がなくなることを願っている。



## 私たちにできること

八幡浜市立保内中学校

二年 奥野 愛唯

今年五月、中学校で交通安全教室が行われた。実技では、交差点の渡り方を再確認したり、通学路を走ったりした。私は休日の部活に行くときくらいしか自転車に乗ることがないので不安だった。しかし、班員と一緒に走り、警察の方や先生方の指導もあり、前よりも自信をもつことができた。信号が赤になり、私だけ班員と離れたこともあったが、焦らずブレーキを握った。無理に渡らず、待つことも大事。交通安全には、心の「余裕」が必要だと身にしみてわかった。

そして、自転車事故のビデオを見た。会社に遅れそうなサラリーマンが、自転車で信号や道路標識を無視し、歩いている人にぶつかってしまう場面があった。被害者の人は、そこで命をおとってしまう。「うそだろ、自転車で人が死ぬなんて。」サラリーマンの言葉と、私の心の声が重なった。子どもからお年寄りまで手軽に乗れる自転車でも、ルールを守らないと人を殺してしまう道具になってしまうのだ。

私も自転車に乗っていて、ひやりとしたことがあった。部活に遅れそうで急いでいたときに、角から出てきた動物や人を、もう少しでひきそうになってしまったのだ。もし、私以外にも自動車や車がそこを通っていたら大事故につながっていたと思う。私は改めて、家を出るときには、時間に余裕をもって、そして周りをよく見て運転しようと思った。

自転車以外にも、交通事故はたくさんある。私が最近に

なっているのは、危険ドラッグや飲酒運転による交通事故だ。不思議なのは、ニュースで毎日のようにそれらの恐ろしさを伝えているのに、同じことをする人が後を絶たないことだ。少しだけなら大丈夫、事故さえ起こさなければ大丈夫、自分は大丈夫といった身勝手な考えがあるのかもしれない。危険ドラッグの事故も飲酒運転による事故も、被害にあう人には何の落ち度もない。突然、今までであった幸せな日々を奪われる人や大切な家族を失う人のことを考えてほしい。どちらも防ぐことのできる事故だと思う。危険ドラッグに手を出さない。飲めば運転しない。乗るなら飲まない。強い意志をもって行動し、少しの楽しみのために失うものの大きさに気づいてほしい。

他にも気になるニュースがあった。高齢者の事故だ。高齢になるにしたがい、視野は狭くなり、本人は見ているつもりでも片方しか確認できてない人が多いと言っていた。私も母の車に乗っているときに、片側だけを見て出てくる高齢者がいて、ドキッとすることが何度もあった。また、運転中の高齢者が、他の車とぶつかりそうになるところも見て、本当に危ないと思った。

高齢者は免許の返納を勧められているが、車がないと買い物や病院にいけない人々が多いのが現実だろう。もっと、だれにとっても便利な社会になるといいと思う。だからそれまでは、高齢者マークをつけた車を見たら、歩行者、自転車側も、相手は見えているだろうと思うのではなく、こちら側も十分に気をつけなければいけないと思う。

また、歩行者や自転車側も注意しなければならない。車が

よけてくれると思うのではなく、自分自身がしっかり交通ルールを守り、時にゆずりあい、互いに気をつけ合う意識が必要だ。少しの余裕と気遣いで、もっと安全な生活が送れるにちがいない。

最近、車のコマーシャルで、障害物を見つけると自動で車がストップする機能を目にする。乗り物や技術は日々事故を防ぎ、不幸な人が現れないように進化している。では、私たちの意識は高まっているのだろうか。技術の進歩に、人の意識や心の発達が遅れないようにしていかなければならない。事故を起こすのは人であり、また事故をなくすことができるのも人なのだから。

みんなが少しの余裕をもって安全運転することで、交通事故はなくなると思う。私も歩行者として、自転車に乗る者として、時間と心の余裕をもっていきたい。

## 交通事故を体験して

愛媛大学教育学部付属中学校

三年 相原 彩乃

ある日曜日の正午。あまりにも唐突すぎる出来事に、何が起こったのかよくわかりませんでした。交通量も比較的少なく見通しの良い、信号機のある交差点で、私は交通事故に巻き込まれました。昨年の秋、たった一瞬の出来事でした。母が運転する普通自動車の助手席に乗り、交差点を通過しようとしたところ、信号無視の軽自動車と衝突したのです。『バンッ』という激しい衝撃音と、車の高速二回転スピン。何が起こったか気付いた時には、時すでに遅し。車道には粉碎した両車の破片が散らばり、まるで星屑のようだ：なんて啞然としていると、カーミラーに真っ青な直径五センチメートルほどのこぶを作り、豹変した私の顔が映りました。激痛とともにこの先どうなるのかという恐怖が襲ってきました。その時、車内から降りてきた加害者の女性が発した言葉が今でも印象に残っています。

「見ていませんでした。」

人生初の救急車、車いすに、ベルトコンベアのようにこなす数多の検査。救急搬送先の医師には、

「あなた、よく生きていましたね。本来この打ちどころだと頬骨が粉碎して顔がしゃげるはずですし、普通だと車体とともに横転を繰り返し、二人とも亡くなっています。」

と言われ肝を冷やしました。事故当日はすんなりと一日を終えましたが、本当の被害はここからでした。後日、私は頸椎、

胸椎の捻挫をしてしまったことが判明し、半年間リハビリに通いました。多大なる時間をリハビリに使うも、なかなか良くならない体に、日々辛さが増してきました。半年経っても治ることがなかったため、後遺症が残り、今でも痛みと戦っています。家族は体に良いと言われていた食材を使って料理をしてくれたり、血行を良くしようと首元を暖められるグッズ等を勧めてくれたりします。しかし、頸椎の損傷から長時間同じ姿勢でいることは、体に負荷がかかります。例えば、授業中、部活動など、以前は何の苦勞もなく取り組んでいたことも、いまとなつては、集中力が持たず、同じ姿勢でいることで痛みやだるさを招いて、あたり前のことをこなすにもひと苦勞です。

この事故を経験するまで、マスメディアで重大な交通事故を耳にするたびに、

「また交通事故か。交通事故が多くなつてきているけど、自分に限ってそんなことは…」などと、他人事として受け取っていました。きっと交通事故を身近に感じたことのない人の中には、交通事故を他人事だと捉えている人も少なくないと思います。今回の事故を通して、自動車は人々にとって大変便利な道具だけど、時に自動車は人を殺す凶器になり兼ねないということを身をもって実感しました。私は偶然が重なって、今生きていることができている。もし、相手の車が大型車だったら、あと〇・一秒早く交差点を通過していたら、事故当時、まわりに自動車が走っていたら、私は亡き人になっていたでしょう。誰にでも交通事故の当事者になる可能性があると思います。国別交通事故発生率で、日本は世界で六番目

に発生率が高いです。その原因として、自家用車の「一家に一台」が当たり前になり所有者の自家用車への危険性の意識が段々と薄くなっていることが一因だと私は考えます。体験した交通事故の加害者の、

「見ていませんでした。」

という発言はその典型だと思います。また、前述した「交通事故は他人事だ」という考えも、交通安全への意識の低下を表しているのではないのでしょうか。

また、加害者の不注意により、被害者の生きている時間＝命を奪う恐れもあります。交通事故で被害者の命に別状はなくとも、通院やリハビリで被害者の大切な時間を奪ってしまうこと、交通事故で負ってしまった外傷やトラウマに一生悩まされながら生きていくことの懸念があります。加害者が被害者の様態を把握するのは事故直後のみかもしれませんが、加害者からは見えないところで被害者は一生事故と付き合っ

ていかなければならないという場合もあります。

私は、一人一人のドライバーに、交通事故に対する意識をもっと高めて欲しいと思います。ドライバーである自分は加害者にも被害者にもなる可能性があるということ、交通事故は他人事ではないということなど、挙げるとキリがありませんがどれも基本的なことです。また、少し気持ちにゆとりを持つだけでも交通事故は十分に防げると思います。交差点で車が来たりしていないか確認したり、子どもの飛び出しに注意を払ってみたりと、時間にゆとりを持つことで気持ちにもゆとりが生まれるのではないのでしょうか。

最後に、相手のことをお互いに思いやる、「思いやり運転」

で一人でも交通事故で悲しむ人が少なくなることを望みます。私も将来、思いやりに溢れたドライバーになりたいです。



# 守り守られ続けたい安全

愛媛大学教育学部付属中学校

三年 和田 幹

つい先日。久しぶりに家の近くの押しボタン信号を利用した。歩行者信号が青になり、左右を確認していると、自動車の信号が赤にも関わらず二台の車が走り去り驚いた。

小学校のころ、通学路にあるこの信号を毎日のように利用していたが信号無視の自動車に出会った記憶はない。そういえば、小学校への登校時、この交差点では保護者の方が交代で旗当番をしてくれていた。そのおかげで登校時の班長として先頭を歩いている時、長い列でも雨の日でも安心して横断歩道を渡れたのだと思う。一方、下校時には「子ども見守り隊」とボランティアの保護者・地域の方がいっしょに下校してくださいることがあり、低学年の時にはウキウキしたものだ。自分の力で登下校しているつもりでいたが、多くの方々に見守られ、安全な登下校ができていたことを今になって気が付きありがたく思う。

小学生の時には、交通安全教室もあった。入学間もないころには、交通指導員の方に教えて頂いて、体育館の中で左右を確認して信号を渡った。本物そっくりの信号が校内にあることがうれしかった。三年生からは自転車教室が始まった。教室で使うための自転車を押しながら登下校するのは、歩きにくくて大変だったがお兄さんになった気分でちよつと自慢だった。自転車屋さんが自転車の点検をしてくださったこともある。運動場いっぱい引かれたコースで交通指導員の方

が模範運転を見せて下さり、安定した美しい乗り方に感心した。私は緊張しながら手信号を練習したものだ。たくさんの方々から安全への手引きを受ける機会に恵まれ、ルールを学んできたのだ。

さらに時間をさかのぼり、幼稚園のころを思い出した。園の近くにお住いの交通指導員の方が、毎朝通園時間に園の辺りにいてくださった。私は大きな声で挨拶するのが楽しみだった記憶がある。母の自転車の幼児シートから降りる時、自転車を支えてくださったりもしたそう。登園時の安全を毎日温かい目で見守って下さる方が幼児期にもおられたのだ。

中学生となった今、私は自転車通学をしている。学校では、毎年新入生を対象とした自転車教室が校内で広くコースをとって行われる。コースの要所要所に先生がおられて、改善すべき点があると警告のカードがかごに入る。カードをもらった生徒は、日頃の自転車の乗り方を省みる機会になるわけだ。ルールを守って安全に自転車を利用しようと改めて自覚できるはずだ。

住まいの地域を少し離れての通学中、それぞれの地域で旗を手に明るい挨拶と共に登校を見守っておられる方々にお会いする。また、大きな交差点では警察の方が朝夕に笛を吹きながら交通指導されていることもある。この時は、歩行者、自動車、自転車、誰もがルールを守り安全が保たれているように心地よく感じる。

私の交通安全への知識・習慣は、長い時間をかけて身につけてきたのだろう。例えば、手を引かれながら家族と家の近くを歩く時、チャイルドシートに座り自動車が出かけるとき

など家族と言葉を交わして覚えたこともあるだろう。何度も読んでもらった絵本の中から知ったこともあるだろう。幼稚園、小学生、中学生と少しずつ広くなっていた行動範囲、社会の中でサポートしてくださる多くの方々との出会いがあり、その方たちから教わったこともたくさんあると思う。将来、運転免許取得のために勉強する時など、これからも新たな方々にお世話になる機会は生まれるであろう。

これまで見守ってもらえばかりだった私だが、今ならこれまでの感謝の気持ちと共に安全のためにできることがあるはずだ。例えば、道を譲ったり、幼い子供の歩行・自転車に気配りしたり、道路の横断が大変な方がおられたらいっしょに歩くこともできるだろう。

この間、赤信号で通過した二台の車について、家で話してみた。日中、信号を利用する家族は、かつて、赤信号で通りすぎていく車に何台も出会っていた。母は、小学校の参観日への、行きにも帰りにも信号を守らない車に出会ったこともあるらしい。それは、ちょうど押しボタン信号のすぐ近くに新しく信号が設置された時期だったようだ。「この辺りには信号は一つ」という感覚を持つ人達が、連続する信号を見落としたのかもしれないと家族は話していた。それならば、通り慣れた道こそ要注意だ。私の通学路に、最近通行方法が歩車分離方式に変わった所がある。こんな時こそ要注意だろう。

多くの方々に見守られて身につけた交通ルール。交通ルールは、誰もが守ってこそ、みんなの安全につながるはずだ。今まで安全に過ごせたことへの感謝の気持ちを忘れず、慣れやうっかりで安全から遠ざかることのないように心がけたいものだ。

## 交通事故から学んだこと

松山市立内宮中学校

三年 土居 百々香

「土居さん、お宅の子やと思うんやけど。」

その日は、土曜日で家族と昼食を食べてのんびりしていました。しばらくして私の弟が

「遊びに行ってくる！」

と言って元気に出て行き、私と母と祖母は

「気を付けてね。いつてらっしゃい。」

いつも通り声をかけました。

すると十分も経たない内に電話が鳴りました。別の部屋にいた母が電話に出たとたんに「ええつつ。」

と大きな声をあげました。高いような低いような悲鳴のような…。ただごとではないと思い、母の所に行くと泣きそうな顔で

「たくが交通事故にあったって、〇〇酒屋の前で倒れてるって。」

と言いつつ震えていたのです。私と母はすぐに走ってそこに向かいました。人が集まり、警察が車を止め救急車が止まり、その人だかりの真ん中に自分の弟とは思えない姿の弟が倒れていました。

「たく、何してるのっ。」

怖くて信じられなくて大きな声で叫びました。怒ってもしかたがないのに意識がない、血だらけの弟に向かって叫びました。

私達が事故現場に着いた時には既に到着していた救急車に乗り、病院へ向かいました。その道中、母と救急隊員の方と一諸に必死で弟に呼びかけました。

その日はちょうど小学校の運動会前日でした。だから、「踊り練習してたよね。見せてくれるんだもんね。」とか、「またお姉ちゃんと遊ぶでしょ。一諸にお散歩するよね。」などに声をかけ、小学二年生の小さな体をさすりました。足を触ると冷たくなっていて、私は声が出なくなりましたが暖め続けました。母が弟の名前を何度も呼び続けていたその時「もう。うるさい。」

と弟の意識が戻ったのです。私達は少しホツとし、それでも声をかけ続けました。

弟は、「痛いー。」と泣き出しました。その時、「生きてる。よかった。」と本気で思いました。病院に着いて、弟は緊急治療室に入れられ、私と母は外で待たされました。その間も弟の泣き声が聞こえると嬉しくて涙が出ました。

緊急治療室から出てきて、初めはICUでしたが、どんどん病室も変わっていき、たくさんの方にお見舞いも来ていただき、弟は元気な姿で家に帰ってきました。でも、事故にあつてすぐの時は食欲もなく、眠ってばかりで顔は腫れていました。その姿を見て涙を流す母。私はそんな母の前では泣けなかったから、夜こっそり泣いていました。

また、私の家はお寺だから、お檀家さん達も心配して家に来てくださいました。

「大事な子じゃのに。」

と涙を流してくださる方もいました。その方一人一人に説明

してくれたのは家にいた祖母です。普段泣かない祖母も元気な弟の姿を見た時は涙を流していました。

弟が入院している時に、弟をはねた車の運転手の方がお見舞いに来てくれました。事故は、弟の確認不足と運転手の前方不注意で起こりました。しかし、運転手の方はとても辛そうで、涙ながらに謝罪されていました。「今まで一度も事故を起こしたことがなかったのに。」と、まだ意識がもうろうとしていた弟に、何度も謝っていました。

今回の弟の事故は、いくつかの奇跡が重なり、大事に至らなかつたんだと思います。

「もし、対向車線に車が走っていたら……。」

「もし、救急隊員の方が、救命センターへ連れて行ってくれていなかったら……。」

今、ここに弟の姿はなかつたかもしれませぬ。

ちよつとした不注意が、少しの油断が、事故を招きます。

全面的に悪いわけでもないのに、運転手の方は、これからずっと心に痛みを感じるのでしょうか。

交通事故が起こることによって、たくさんの人の心や身体が傷つきます。だからこそ、日頃の学校での交通指導をきちんと聞き、日常でもそれを守った行動をすることが事故にあわない第一段階だと思えます。自分はもちろん、大事な家族を悲しませないためにも、安全確認と交通ルールを守ることの大切さを伝えたいです。



## 交通事故をなくしたい

松山市立垣生中学校

三年 井上 瀬菜

七十人。昨年の愛媛県の交通事故による死者数だ。数字にすると少なく見えるかもしれない。しかし、「死者七十人」とは、「七十人の方の人生が突然、交通事故によって終わりを告げられた」ということと同じなのだ。

調べてみると、県内だけでも昨年度の交通事故発生件数は六千件以上、傷者数は八千人近くにも上ることが分かった。どうして交通事故がなくならないのか。私たち中学生にとって最も身近な自転車の交通事故を中心に考えてみたい。

先日、私たちの学校では、「自転車安全教室」が行われ、主に三つのことを教えていただいた。

一つ目は、どんな所に危険が潜んでいるのか、ということだ。具体的には、交差点の危険な箇所や、トラックをはじめとする自動車の内輪差などだ。他にもさまざまな場面の映像を見せていただき、危険に気づく力を身に付けることができた。中でも最も印象に残ったのは、車の陰から、別の車が出てくる場面だ。なぜなら、私自身も同様な場面で危険を感じた経験があるからだ。それは下校中、横断歩道を渡っている時のことだった。右側から来る車はなかったが、左側には、私のいる場所と同じ曲がり角から左折中の車があった。実際、左側からは、車が来ていたが、左折中の車で見えなかった。私は油断していた。早く帰宅しようと急いでいた面もあったのかもしれない。よく確認もせず、横断歩道を渡ってしまっ

たのだ。すると、左側から速いスピードの車が来るのが目に入った。慌てた私に速く見えただけなのだろう。だが、そのときの経験が怖かった記憶として、今でも鮮明に私の中にある。幸い車がブレーキを掛け、止まることができたため、事故にはならずに済んだ。私は徒歩だったが、もしも自転車に乗っていて、そのまま横断歩道に飛び出してしまっていたら、車は急すぎて止まれなかったかもしれない。考えるだけで恐ろしい。私はこの経験をを通して、道路で車を強く意識するようになった。今回の自転車安全教室では、その記憶を呼び起こし、危険を再確認できた。

二つ目は、どのようなことに注意して、自転車に乗ればよいのか、ということだ。このお話で、私もいくつかの反省すべき点に気づくことができた。まず、点検を行わず自転車に乗っていたことだ。もしブレーキが壊れていたら、事故になっていただろうという場面をいくつか思い出し、恐ろしかった。次にヘルメットをかぶらずに自転車を使っていたことだ。自転車事故での死因の大半は、頭部への打撃だそうだ。つまり、頭部を保護するヘルメットをかぶっていると、自転車事故による死亡リスクを大幅に減少させられるのだ。ヘルメットの着用はルールとして定着しつつある。しかし、それを守っている人は、あまり見受けられない。多くの人が、ヘルメットをかぶらず、自転車で乗っている。私もそんな人たちの一員だった。ヘルメットは購入したものの、周囲の目が気になってほとんど使用できず、保管されている。町で見かける人たちも、恥ずかしさで、ルールが守れないのだと思う。もしくは、その必要性を十分に理解していない人もいるので

はないだろうか。私は知識を得た以上、これからは自分のために、実行していきたいと思う。正しいことは正しいと、はっきり言えるような態度で、自転車に乗りたい。

三つ目は、自転車に乗ると、事故の加害者にも被害者にもなりうる、ということだ。実際に、中高生の運転する自転車と歩行者が衝突し、中高生が加害責任を問われた事例もあるそうだ。「後悔してからでは遅すぎる」このフレーズが、深く心に残っている。歩道は例外を除き、自転車で通行してはならない。これは、歩行者を守るためのルールだ。守られずに事故が起こってしまったら、歩行者だけでなく、人を傷つけた自転車の利用者も、辛い思いをするだろう。大切なのは相互を思いやる気持ちなのだと思う。

自転車安全教室を通して私は、これらの知識や考え方、安全に対する強い意識を得た。町には、交通マナーの悪い人やルールを守らない人が大勢いるが、こうした人たちは全員が、加害者予備軍だと私は考える。歩行者と自転車なら自転車、自転車と自動車なら自動車。より大きく強い乗り物に乗っている人が加害者とされることが多いが、本当にそうだろうか。交通事故は、意図的なものや悪質な違法運転を除き、関わったすべての人に責任があるのではないか。私もまた例外ではない。常に周囲に気を配り、加害者にも被害者にもならないよう、心がけていきたい。そしていつか、愛媛県、いや全国、全世界から交通事故がなくなる日が来ることを、心から願っている。



# 自転車に「TSマーク」を貼いましょう！！

## ◇ TSマークには保険が付いているので安心

- 年に1回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「TSマーク」が自転車に貼付されます。
- 「TSマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



## ◇ 付帯保険の補償内容が変更(H 26.10.1 ~)

補償内容	従 来	平成 26 年 10 月 1 日 ~
① 賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○ 死亡・重度後遺障害 (1~7級)  限度額 <b>2,000 万円</b>	○ 死亡・重度後遺障害 (1~7級)  限度額 <b>5,000 万円</b>
② 傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○ 入院 15 日以上 <b>10 万円</b> ○ 死亡・重度後遺障害 (1~4 級) <b>100 万円</b>	変更なし
③ 被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	な し	(新設) ○ <u>入院 15 日以上 10 万円</u>

## インターネット完結型の自転車保険の販売開始

~ 自転車利用者のリスクに備える保険として26.11.11に開始 ~

☆ 全国的に自転車の交通事故で、約 9,500 万円などの高額賠償事案が増加！！

### 4つの特徴

- 1 事故の相手に対する賠償責任を **最大1億円** まで補償！
- 2 保険会社による **示談交渉サービス付き** なので安心！
- 3 自転車事故の他 **交通事故** によるご自身のケガ も補償！
- 4 インターネットによる **簡単な手続き**！

保険料の支払いは便利なクレジットカード払い！

### 加害者となり、損害賠償責任を負った場合の補償

1. 自転車で相手をケガさせた。
2. 自転車で他人の財物を壊した。



### ご自身のケガの補償

3. 自転車で転倒してケガをした。



◎ 詳細については、愛媛県交通安全協会のホームページをご覧ください。

## 交通安全年間スローガン最優秀作

○ こどもの部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	十二年	まもろうね みつつのいろの おやくそく
同	十三年	あぶないよ よそみ おしゃべり ふたりにり
同	十四年	そこちがう しましまマークが ついてない
同	十五年	じてんしゃも いちじていしで みぎ ひだり
同	十六年	まあだだよ 信号青でも 右左
同	十七年	よくみてね！ いっぱいのぼした もみじのて
同	十八年	手を上げて しっかり見よう 右左
同	十九年	青だけど 車はわたしを 見てるかな
同	二十年	点めつだ 一度止まって 次の青
同	二十一年	じこがない そんなまいにち うれしいな
同	二十二年	さあかくにん ライト ブレーキ ヘルメット
同	二十三年	星キラリ 自転車ピカリ 帰り道
同	二十四年	いそいでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぼんを じまんしようよ 事故ゼロで

～愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛各社～

【四国中央市】

四国紙販売(株)  
大王製紙(株)  
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)  
桑原運輸(株)  
住友化学(株) 愛媛工場  
住友金属鉱山(株) 別子事業所  
(株)ハタダ

【西条市】

四国開発フェリー(株)  
(株)田窪工業所

【今治市】

一広(株)  
今治造船(株)  
今治ヤンマー(株)  
渦潮電機(株)  
四国ガス(株)  
四国通建(株)  
瀬戸内運輸(株)  
太陽石油(株) 四国事業所  
波止浜興産(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)  
アサヒビール(株) 松山支社  
(株)アテックス  
(株)井関松山製造所  
(株)伊予銀行  
(株)伊予鉄高島屋  
伊予鉄道(株)

(株)愛媛銀行  
(株)愛媛新聞社  
愛媛信用金庫  
愛媛総合警備保障(株)  
愛媛トヨペット(株)  
愛媛日産自動車(株)  
サークルケイ四国(株)  
JA共済連 愛媛  
四国電力(株)松山支店  
セコム(株) 松山統轄支社  
ダイキ(株)  
(株)たいよう共済 愛媛支店  
帝人(株) 松山事業所  
南海放送(株)  
日本郵便(株) 四国支社  
(株)フジ  
三浦工業(株)  
(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場

【大洲市】

(株)オズメッセ

【八幡浜市】

(株)あわしま堂  
(株)サンリード

【宇和島市】

宇和島自動車(株)  
宇和島信用金庫



あんきょう

愛媛県交通安全協会・各地区交通安全協会

我々は、交通安全に対する意識の高揚と  
交通マナーの向上に努めます。

一般社団法人  
愛媛県交通安全協会  
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101